第１０回
九州地域医療教育研究会

日時 ２０２４年５月１１日（土）１４：００-１８：００

場所 沖縄県立博物館・美術館（那覇市おもろまち3丁目1番1号）

対象 九州・沖縄の各大学の地域医療関係の医師・医学生

当番世話人：川妻 由和（琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター 副センター長）

基調講演

九州地域医療教育研究会の歩みと展望

鹿児島大学病院　地域医療支援センター　センター長　嶽崎俊郎先生

合同企画 学生セッション

心に残った地域医療・臨床実習・その他の活動を共有する

メイン シンポジウム

ポストコロナ時代の地域医療教育 ～協調を考える～

お問合せ 沖縄県地域医療支援センター
TEL:098-895-1225　FAX:098-895-1230　Mail:chi@w3.u-ryukyu.ac.jp

第 10 回 九州地域医療教育研究会　概要

テーマ：ポストコロナ時代の地域医療教育～協調を考える～

当番世話人：川妻 由和（琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター 副センター長）

日　時：令和 6 年 5 月 11 日（土）14：00～ 18：00（予定）

会　場：沖縄県立博物館・美術館　３Ｆ　講堂
〒900-0006　沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1
https://okimu.jp/

発表者：発表希望の各大学の医師、教職員、学生

発　表：スライド使用の口頭発表形式

事務局：琉球大学病院　沖縄県地域医療支援センター
〒903-0215　沖縄県中頭郡西原町字上原 207 番地
琉球大学病院　おきなわクリニカルシミュレーションセンター内 101
TEL：098-895-1225　　FAX：098-895-1230

世話人会

日　時：令和 6 年 5 月 11 日（土）13:00～13:30（予定）

会　場：沖縄県立博物館・美術館　1Ｆ　県民ギャラリースタジオ
〒900-0006　沖縄県那覇市おもろまち 3-1-1

懇親会

日　時：令和 6 年 5 月 11 日（土）19：00～21：00 (予定)

会　場：抱瓶　那覇久茂地店
〒900-0015 那覇市久茂地 2 丁目 18－1　TEL : 098-860-1046
https://dachibin-okinawa.com/
（学生以外　5,000 円　、学生　2,000 円）

皆様へのお願い

1. 受付について

   13：15 より開始します。

   受付の際に学生以外の方は、研究会費として一律 1,000 円お支払いください。

   領収書の発行をいたします。

2. ご発言・ご質問について

   挙手後、座長の許可を得たうえで所属と氏名を明言ください。

3. 研修会会場について

   会場は、飲食不可となっております。

   会場舞台裏の控室のみ飲食可能となっております。

   （ミネラルウォーターをご用意しております）

4. ドレスコードについて

   クールビズ（ノーネクタイ）でお願いいたします。

演者へのお願い

1. スライド発表の受付について

   動作確認のため、当日のスライド受付は 13:15 から開始いたします。

   発表データは、ノート PC もしくは USB にてご持参ください。

2. 演題発表について

   学生セッション ： 発表時間 7 分、質疑応答時間 3 分

   シンポジウム ： 発表時間 10 分

   時間厳守にてお願いいたします。

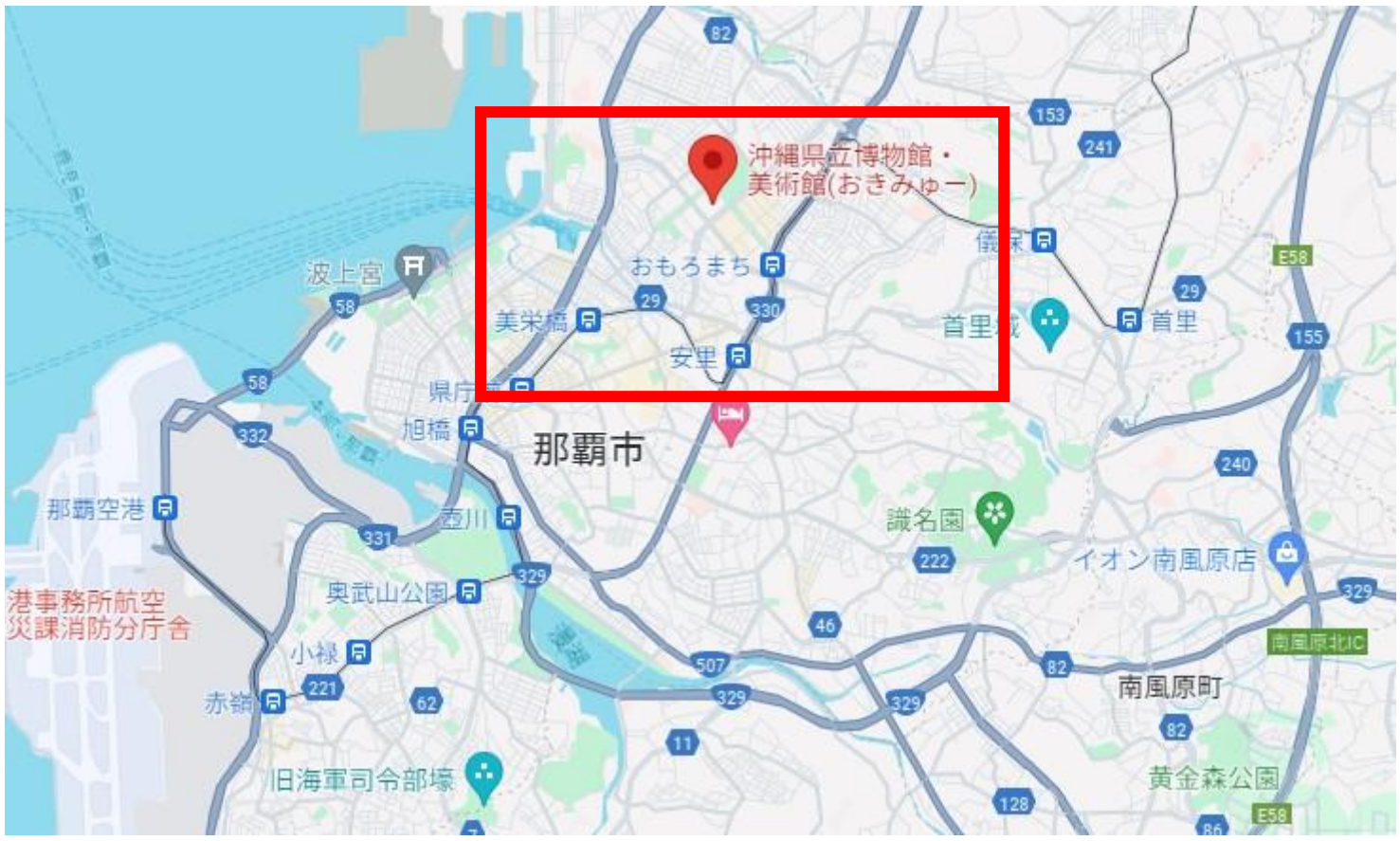
3. データについて

   当日の発表は PC 発表のみです。

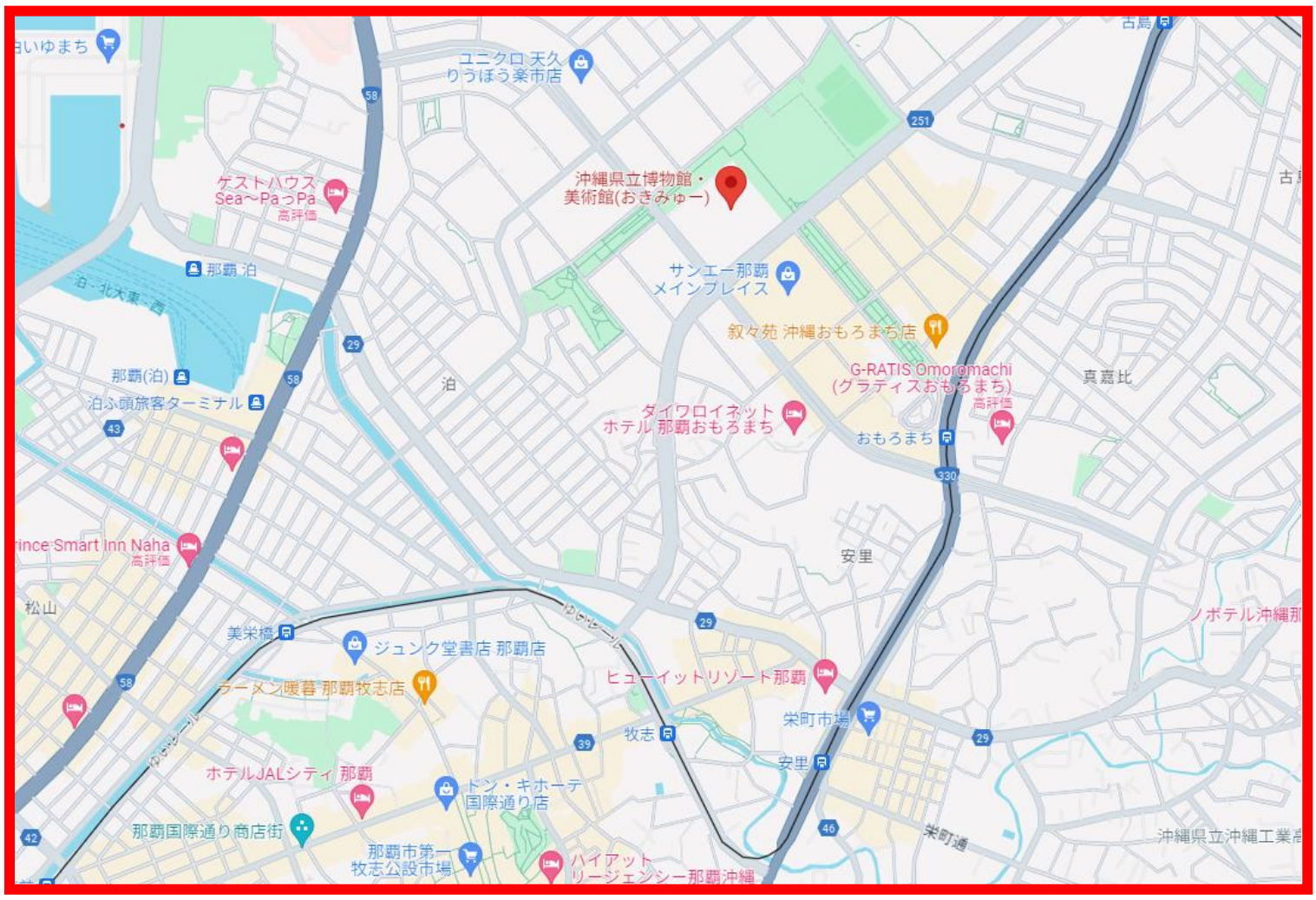
   発表データは研究会終了後、事務局で責任をもって消去いたします。

研究会会場（沖縄県立博物館・美術館）　地図・アクセス

＜広域地図＞



＜周辺地図＞



◇那覇空港から

	モノレール（ゆいレール）利用	バス利用【99】天久新都心線
乗車駅・バス停	【１】那覇空港駅（始発）	国内線旅客ターミナル前 （那覇バスターミナル向け）
降車駅・バス停	【11】おもろまち駅	おもろまち３丁目
所要時間	19 分	約 30～40 分
降車駅・バス停から徒歩	10～15 分	9～12 分

◇混雑が予想されるため、公共交通機関をご利用ください。

◇近隣駐車場※有料
研修会会場駐車場が満車の場合、
近隣駐車場は右地図をご参照ください。

懇親会会場　地図・アクセス

抱瓶　那覇久茂地店
那覇市久茂地２丁目 18－1
TEL : 098-860-1046
https://dachibin- okinawa.com/

ゆいレール美栄橋駅より徒歩３分

プログラム

14：00～14：05　**開会の挨拶**

第 10 回 九州地域医療教育研究会 当番世話人

琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター 副センター長 川妻 由和

14：05～14：45　**基調講演**

九州地域医療教育研究会の歩みと展望

座長：鹿児島大学医学部長

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科

離島へき地医療人育成センター　センター長／地域医療学分野　教授

鹿児島大学病院　地域医療支援センター　兼務　大脇 哲洋

演者：九州地域医療教育研究会　会長

鹿児島大学病院 地域医療支援センター センター長　嶽﨑 俊郎 先生

休憩～25 分～

15：10～16：10　**合同企画：学生セッション**　発表 7 分、質疑応答 3 分

心に残った地域医療・臨床実習・その他の活動を共有する

座長：宮崎大学医学部地域包括ケア・総合診療医学講座　教授　吉村 学

演題 1：「冬季地域医療特別実習 in 阿蘇」の報告

熊本大学医学部医学科 5 年　山口 真子

演題 2 ：心に残った地域医療・臨床実習・その他の活動共有

宮崎大学医学部医学科 5 年　松元 亮弥

演題 3 ：心に残った地域医療・臨床実習・その他の活動共有

宮崎大学医学部医学科 6 年　村社 優介

演題 4 ：琉球大学「地域枠について語る会」活動報告

琉球大学医学部医学科 4 年　比屋定 結子

演題 5 ：長崎大学の地域医療教育を学生の立場から考える

長崎大学医学部医学科 6 年　松竹谷 海斗

演題 6 ：「地域医療実習に参加して学んだこと」

佐賀大学医学部医学科 6 年　樋口 美祈

演題 7 ：「地域医療実習に参加して学んだこと」

佐賀大学医学部医学科 5 年　松浦 佐紀

休憩～15 分～

16：25～17：55　**メインシンポジウム**　プレゼンテーション 10 分／総合討論 30 分

ポストコロナ時代の地域医療教育～協調を考える～

座長：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 離島・へき地医療学講座
長崎大学病院　総合診療科 教授　前田 隆浩

座長：琉球大学病院 沖縄県地域医療支援ｾﾝﾀｰ　副ｾﾝﾀｰ長　川妻 由和

演題 8：長崎・熊本・鹿児島で取り組むポストコロナ時代の地域医療教育

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　地域医療学分野　永田 康浩

演題 9：ポストコロナ時代の地域医療教育

久留米大学　地域医療連携講座　富永 正樹

演題 10：大分大学におけるコロナ前後の地域医療実習

大分大学医学部附属地域医療学センター　塩田 星児

演題 11：「ポストコロナ時代の地域医療教育」 ～協調を考える～

くまもと県北病院　総合診療科　小山 耕太

演題 12：ポストコロナ時代の地域医療教育　～協調を考える～

「新たな時代の人材育成、離島から発信できるか」

琉球大学医学部医学教育企画室　金城 紀与史

演題 13：Z 世代が地域医療を担うとき　―Z 世代の学びと育成の悩み―

琉球大学病院　救急部　大内 元

総合討論

17：55～18：00　**閉会の挨拶**

九州地域医療教育研究会　会長

鹿児島大学病院　地域医療支援センター　センター長　嶽﨑 俊郎

抄録

基調講演

【演者】

嶽﨑　俊郎（たけざき　としろう）

九州地域医療教育研究会　会長

鹿児島大学病院　地域医療支援センター　センター長

【略歴】　（２０２４年５月現在）

1982 年　長崎大学医学部卒業

1982 年　鹿児島大学医学部付属病院・研修医（小児科）

1983 年　宮崎県串間市国民健康保険病院（小児科）

1984 年　鹿児島大学医学部付属病院・研修医（小児科）

1984 年　鹿児島県曽於郡医師会立病院（小児科）

1985 年　鹿児島大学医学部付属病院・医員（小児科）

1986 年　熊本県龍ヶ岳町立上天草総合病院（小児科）

1987 年　鹿児島大学医学部付属病院・医員（小児科）

1990 年　鹿児島大学医学部・文部教官助手（小児科）

1993 年　愛知県がんセンター・主任研究員（研究所・疫学部）

2002 年　愛知県がんセンター・室長に昇任（研究所／疫学・予防部／がん予防研究室）

2003 年　鹿児島大学大学院医歯学総合研究科・教授（国際離島医療学分野）

2007 年　鹿児島大学大学院医歯学総合研究科・離島へき地医療人育成センター長を兼務

2017 年 4 月-2019 年 3 月　鹿児島大学医学部・副医学部長

2017 年　鹿児島大学　国際島嶼教育研究センター・教員を兼務

2019 年　鹿児島大学病院　地域医療支援センター・教員を兼務

2022 年 3 月　鹿児島大学　定年退職

2022 年 4 月　鹿児島大学病院　地域医療支援センター　特任教授　センター長

現在に至る

学会及び社会における活動等

会　長: 九州地域医療教育研究会、鹿児島農村医学研究会

評議員・代議員：へき地・離島救急医療学会

学会員：日本疫学会、日本公衆衛生学会、日本プライマリ・ケア連合学会、日本医学教育学会、日本小児科学会、へき地・離島救急医療学会、日本がん疫学・分子疫学研究会、日本人間ドック学会

NPO 法人こども医療ネットワーク会員（元　理事）

鹿児島県 JICA 派遣専門家連絡会（幹事、元会長）

指導医等：社会医学系専門医・指導医、上級疫学専門家、日本公衆衛生学会認定専門家、日本人間ドック学会認定医

賞罰

2001 年　第 11 回日本疫学会奨励賞

2013 年　与論町感謝状

2019 年　JICA 九州所長感謝状

2021 年　鹿児島大学医学部医学科ベストテーチャー賞

2022 年　鹿児島県医師会医学賞

研究テーマ

生活習慣病予防に関する分子疫学研究

研究歴

鹿大小児科

HTLV-I 母子間予防に関する研究

愛知県がんセンター

喫煙関連がんに関する病院疫学（HERPACC）研究

肺がんに関する日米共同疫学研究

消化器がんに関する日中共同分子疫学研究

鹿大国際離島医療学

日本多施設共同コーホート（J-MICC）研究

あまみ島嶼地域における疫学研究

渡航歴

JICA 長期専門家（13 か月間）

中国山東省

HTLV-I 研究

ボリビア、コロンビア、ベネズエラ、ジャマイカ

中国（チベット）、ネパール

がんの疫学研究

中国（江蘇省、重慶市、遼寧省、広東省）　21 回

韓国

日本学術振興会日米がん研究協力事業

米国

JICA ワークショップ現地開催

フィリピン、ソロモン諸島、サモア、パプアニューギニア、フィージー、キリバス

【演題】九州地域医療教育研究会の歩みと展望

九州地域医療教育研究会は、九州における地域医療に関する診療・研究・教育の進歩発展と知識の普及を図り、社会に寄与する事を目的として、2011 年 4 月 8 日に設立されました。九州・沖縄の各大学の世話人が毎年、持ち回りで当番世話人となり、各県で研究会を開催しており、コロナ禍を挟んで、今回で 10 回目の開催となります。

第 1 回の研究会は、地域医療教育がまだ発展段階にあった中、各大学がそれぞれ手探りで始めていた地域医療教育に関する情報交換の場として鹿児島の地から始まりました。以下にこれまでの当番大学と世話人、テーマをまとめてみます。

第 1 回	鹿児島大学（嶽﨑俊郎）	九州地域医療研究会の設立
第 2 回	長崎大学（前田隆浩）	地域医療実習の質の向上のための取組み
第 3 回	大分大学（宮﨑英士）	地域医療教育の現状とキャリアパス・プラン
第 4 回	宮崎大学（長田直人）	地域志向型教育の再考
第 5 回	熊本大学（松井邦彦）	継続的に地域貢献できる医師の養成
第 6 回	九州大学（貝沼茂三郎）	地域医療に貢献する医師をより多く養成するために
第 7 回	久留米大学（足達　寿）	地域に根付く医師の確保を目指して
第 8 回	鹿児島大学（大脇哲洋）	地域を知ろう！
第 9 回	佐賀大学（杉岡　隆）	地域志向性を高める医学教育とは？

良く工夫されたテーマから、地域医療教育の改善から質的向上にむけての変遷、特に地域に重きをおいた視点がうかがわれます。

九州・沖縄地域は離島・へき地を含む多様な地域医療の場を有し、医師の確保や医療体制の確保には難渋する一方、地域医療教育のフィールドには恵まれている面もあります。九州地域医療教育研究会は、共通する強みを持つ関係者が集まり、情報交換できる場となっているとともに、学生や、地域医療現場で学生教育に携わって頂いている医師らが参加しやすい場にもなっています。特に他県の取組には刺激を受けるとの声を多く聞きます。さらに、昼間の研究会とともに夜の懇親会も県をまたいでの有用な交流の場になっています。現地開催が難しかったコロナ禍時に、オンライン開催が見送られたのも、この有用な場を生かしたいがためでありました。

地域医療教育も次第に成熟しつつあり、担当者も新たな世代に引き継がれつつあります。当研究会も、地域医療教育の根幹は守りつつ、新しい視点で、それぞれの地域の特性を生かしながら九州・沖縄地区の地域医療教育の発展に寄与し、ひいては医療人育成をとおして地域医療に貢献することが望まれていると思います。

合同企画・学生セッション

演題１ :「冬季地域医療特別実習 in 阿蘇」の報告

〇熊本大学医学部医学科５年　山口 真子

【開催概要】

熊本大学では、地域枠学生を対象に将来の勤務地候補の「地域を知る」ことを目的に地域医療特別実習を行っている。2023 年度はコロナ禍で 3 年ぶりとなり、夏季と冬季にわけて 1 泊 2 日で開催された。冬季実習では、熊本大学 11 名と琉球大学１名の 1–4 年生が参加し、事前学習、医療施設・福祉施設の訪問、行政との意見交換を行った。

【実習成果】

地域の特徴や医療提供体制について事前学習を行った。実習前後のアンケートでは「地域医療には夢がある」の項目にてポイントが有意に上昇し、地域医療に関する知識の理解度は全 17 項目において有意に高くなった。実習後の振り返りでは、地域医療の実状を学び、目指す医師像がより明確になった、地域医療は今後の医療の先駆けであると感じた、多職種連携の重要性を再認識した等の感想が寄せられた。参加者の多くが積極的、主体的に参加し、患者を全人的に診れる医師が求められていると実感していた。

【まとめ】

地域医療特別実習は、実際に現地に赴くことで、地域の魅力を実感し、将来像の形成、地域医療への意欲向上に寄与すると考えられる。

演題２：**心に残った地域医療・臨床実習・その他の活動共有**

〇宮崎大学医学部医学科５年　松元 亮弥

臨床実習が始まってから半年が経過した。現在 1～２週間ごとに様々な科を回っている。大学での実習では、高度な医療を見学できるのはもちろん多種多様な疾患を見ることができるので大変ながらも充実した実習を送ることができている。

しかし大学病院は三次医療を担っている場である以上プライマリ・ケアとはかけはなれた環境にあり、将来プライマリ・ケアに従事したいと考えている私は、大学で学ぶ以外にも市中でプライマリ・ケアを担っているような病院でも学びたいとしばしば考えている。地域実習として大学関連の市中病院で２週間実習をすることはできるのだが、私が回った際に不運にもコロナのクラスターが発生し、自宅隔離などが重なったため消化不良のまま２週間を終えてしまった。

そこで何かしたいと地域医療講座の吉村教授に相談したところ、春休み期間中に先生の当直に同行させていただくことになった。そこでは一次救急の様子、様々な症状の患者さんがやってくる中で限られた検査の中、医師がどの様に対応しているのかを学ぶことが出来た。今回は特にその中でも私自身が実際に救急患者の対応に関わった話と、そこで感じたことについて共有したい。

演題３：**心に残った地域医療・臨床実習・その他の活動共有**

〇宮崎大学医学部医学科６年　村社 優介

現在私は都農町に住み込みで 12 週間の実習（現在 6 週目）を行う Longitudinal Integrated Clerkship(以下 LIC)に参加している。「研修医０年目」を合言葉に日々鍛えられている。なぜこの実習を選択したか、実習当初の様子から現時点までの自身の経験、印象に残ったことを発表する。

外来では、症候からどのようにアプローチしていけばよいかを自分の頭で考え、治療計画をわかりやすく患者に伝えるという力が身についた。病棟では、担当患者の診察、記録を行い、上級医と退院までの綿密な計画を練る。病気の治療にとどまらず、患者の身体機能、生活背景を考えた計画を立てるのは容易なことではなかったが、経験を積むごとにその思考回路が段々と身についているのを実感した。訪問診療では、患者家族の意向や療養の場という背景を踏まえたマネジメントの重要性を学んだ。家族間での衝突や診療を拒否する患者に直面したりと、それがとても印象に残っている。また院外や地域の中で学ぶこと（乳幼児健診や産業医活動等）もどんどん任せていただけるので地域を丸ごとみていく視点が育ってきている。

長期にわたって患者を診る、コモンな症候を網羅的に学ぶ、さらには地域の住民と関係を築き、地域に根差した医療について深く考えることは、LIC でなければ不可能であると思う。「研修医０年目」として自分にできることを考え、臨床で必要な様々なスキルや態度を学んでいくだけでなく、専門職としてやっていくのだという覚悟が少しずつ芽生えてきているように自分で感じている。

演題４：**琉球大学「地域枠について語る会」活動報告**

〇比屋定 結子[1]、賀数 りち[2]、後呂 友紀[3]、川妻 由和[4]

[1]琉球大学医学部医学科４年
[2]琉球大学医学部医学科３年
[3]琉球大学医学部医学科２年
[4]琉球大学病院 沖縄県地域医療支援センター

【背景】琉球大学では毎年 17 人が地域枠学生として入学している。世間では、地域枠制度に関する様々な意見が存在しているが、地域枠学生同士で意見交換する機会は少なく、意見が表在化することはほとんどない。

【目的】地域枠学生の意見とその根本にある問題点を表在化させ、今後の地域枠制度の施行に意見を反映させる。

【手法】2023 年 8 月 11 日に地域枠学生 1～6 年次を対象に「地域枠について語る会」を開催した。3～4 人ずつに分かれて地域枠に関することを自由に話してもらい、KJ 法による意見のグループ化を行った。

【結果および考察】学生 11 人が参加し、キャリアやプライベートに関する不安、カリキュラムに関する意見、地域枠学生としてのモチベーションを高める機会への期待が明らかになった。また、今回の企画を通して他学年との交流を持てたことに対する好意的な意見が多く集められた。しかし、今回は参加人数が少なく、モチベーションの高い人の意見に偏っている可能性があるため、より多くの学生から意見を集めたい。

【まとめ】地域枠学生が抱える不安や本音の一部を表在化することができた。今後もさらなる地域枠学生同士の交流・意見交換の活発化を目指したい。

演題５：**長崎大学の地域医療教育を学生の立場から考える**

〇松竹谷 海斗[1]、野中 文陽[2]

[1]長崎大学医学部医学科６年
[2]長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　離島・へき地医療学講座

私は長崎大学医学部地域枠学生として６年間で３回の離島をフィールドとする地域医療学習の機会があった。

（１）地域医療セミナー in GOTO：３年次に学生実行委員長として参加した。福祉系学科学生と共修するセミナーの企画に加わったが COVID19 の影響で五島訪問が叶わずオンラインセミナーとなり残念であったが、より離島への思いが増した。

（２）臨床実習（離島医療・保健実習）：５年次に上五島で医療機関だけではなく、行政や福祉施設など、地域で勤務する多職種の活躍を目の当たりにすることができた。島の小さなコミュニティだからこそ有機的な関係性を構築していることを実感した。

（３）高次臨床実習：４週間の離島実習を選択し、島唯一の地域中核病院の外科に配属された。医療チームの一員として扱っていただき、手探りであったが勉強しながら頑張れたことは今後の医師となるうえでの覚悟ができた。また、医師と患者の距離感が短いこと、多職種が私達学生を温かく地域へ招いてくれたことが印象的だった。

来年度には初期研修医となる私にとって、離島をフィールドとした地域医療の学習経験は、多職種連携の重要性、医師としてのプロフェッショナリズムの意識向上に繋がったと感じた。

演題６ :「地域医療実習に参加して学んだこと」

〇佐賀大学医学部医学科６年　樋口 美祈

【背景・目的・方法】佐賀大学医学部では地域医療の特徴や住民のニーズを知ることなどを目的として高学年次に「地域医療実習」２週間が必修となっている。地域密着型医療機関・クリニックと地域中核病院でそれぞれ１週間実習を行い、その前または後にある２週間の総合診療部実習と合わせて評価等を行っているので、その４週間について報告する。

【結果】特に、地域密着型医療機関・クリニックでは、患者との近接性や長年に渡る継続性を知ることができ、強い信頼関係が確立されていることも学ぶことができた。ターミナルケアも担当しており、今の状態を受け入れられない本人や家族を前にしてどうすれば理解してもらえるのか、相手の話を聞きつつ言葉を選びながら伝えているのが印象的で、「患者と向き合う」という言葉があてはまる場面だった。

【考察・結語】地域の医療機関で見るものが新鮮に感じたが、実際は大多数の医療者が一次医療に携わっており、患者さんが医療を求める窓口もこの地域医療の場であることを改めて実感した。

演題７ :「地域医療実習に参加して学んだこと」

〇佐賀大学医学部医学科５年　松浦 佐紀

【背景・目的】合同夏期地域医療実習（以下 A）と赤ひげのいるまちの取材の経験（以下 B）について報告する。

【方法】A は地域医療（離島や山村のへき地医療を含む）や在宅医療の現状を知り、課題について考えること、佐賀県の医療、保健、福祉の現場で活躍する医師、医療従事者等の考えに触れ、医師の役割や責任、やりがいについての認識を深めることを目的とする実習であった。3 日間の実習で参加者は 21 名であった。 B は長年にわたって地域を支えてきた医師への取材や、佐賀県の日本医師会長との対談を通して、地域医療および佐賀県の医療の特徴や課題を学ぶ経験であった。合計３日間の取材ロケで参加者は４名であった。

【結果・考察】A では医療現場における ICT 活用や、離島での生活・医療のあり方について深く学び考えることができた。また、在宅医療や離島医療における課題も学ぶことができた。B では「病気ではなく、人をみる」ことや、身体診察、言葉の選び方など、医師として大切なことを非常に多く学ぶことができた。

メインシンポジウム

演題８：**長崎・熊本・鹿児島で取り組むポストコロナ時代の地域医療教育**

〇永田 康浩[1]、川尻 真也[2]

[1]長崎大学大学院医歯薬学総合研究科　地域医療学分野
[2]長崎大学医学部医療人材連携教育センター

地域医療教育は今や医学教育において不可欠な要素となっている。元来、地域医療教育はそれぞれの大学が置かれた地域の特性を生かして繰り広げられるものである。長崎大学でも 2004 年以来、離島を起点として地域で学ぶ地域基盤型教育を発展させてきた。しかし、COVID-19 パンデミックによりすでに当たり前となっていた地域医療教育の基盤が揺らぎ、実践的な学びの脆弱な部分を改めて認識させられることになった。我々はこの経験を活かし、社会の変化に対してレジリエンスな地域医療教育を構築する機会を得たことになる。今回、九州西南の３つの大学が地域医療というキーワードにより連携し、感染症、災害、離島医療などそれぞれの強味を生かした教育コンテンツの開発に取り組んでいる。先進的なデジタル技術を駆使しそれぞれがもつ多彩な教育資源を共有し、地域医療教育の新たな可能性に挑戦する取り組みを紹介するとともに、今後の展開について述べる。

演題９：**ポストコロナ時代の地域医療教育**

〇久留米大学　地域医療連携講座　富永 正樹

久留米大学では１年生（老健施設や特別養護老人ホーム），２年生（緩和ケアや消防署、へき地など）に対し施設実習を２週間行い、５年生の臨床実習では久留米医療センターの総合診療部を通じて４週間地域の関連病院で実習を行っている。蔓延期の 2020、21 年では、施設実習が全くできず、22 年は３日間、23 年は１週間と短縮せざるを得なかった。

施設実習ができない時間を使って、協同学習を行うだけでなく、各施設の医師、看護師、ソーシャルワーカーに来ていただき、実際の現場での仕事内容や問題点などを講義していただき多職種連携の必要性を説明してもらった。さらに簡易版の OSCE、協同学習、医療面接、外来患者付き添い実習および手洗い・エプロン着脱実習を行った。実習に参加する際にも、従来の見学だけではなく、現実の医療に触れるという体験をし、終了後は全員にスライドによるプレゼンテーションを行い、知識をシェアリングすることを試みた。今後は医学入門実習、協同学習と協力することで、医学部教育への取り組みのモチベーションを高め、学習意欲の高揚を図り「全人的医療」を展開できる医師を育成したいと考えている。

演題 10：**大分大学におけるコロナ前後の地域医療実習**

〇塩田 星児、堀之内 登、宇都宮 理恵、土井 恵里、川﨑 貴秀、山本 恭子、
上田 貴威、宮﨑 英士
大分大学医学部附属地域医療学センター

大分大学は 2010 年より医学部学生の 5 年次において滞在型の地域医療実習を導入してきた。大分県内の 16 の実習病院が登録され、約 100 名の学生を 5 つのグループに分け、それぞれのグループを約 2 名ずつのペアに編成し、2 週ごとに滞在しながら病院、診療所、介護福祉施設、在宅での実習を行っている。

2020 年度からの新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行に伴い、地域医療実習を含む臨床実習のあり方について医学部対策ワーキンググループ会議で検討した。また、地域医療実習の実習施設と実習の継続の是非について議論した。その結果、学生が COVID-19 に感染するリスクや、実習施設にウイルスを持ち込む可能性への懸念はあるものの、医学生が実際の医療現場で経験を積むことが医師としての資質を向上させる重要な要素であり、COVID-19 感染予防を現場で実体験させる絶好の学修機会であるという考えから、地域医療実習は中断することなく継続することとした。一部の施設訪問は病院での実習に置き換えられるなどの調整が行われた。また、大学におけるオリエンテーションやグループワーク、まとめについては、オンラインで実施したが、2021 年度からは通常通り対面で実施した。

医学生にとって、コロナ禍においても実地経験こそが地域医療実習の根幹を成すものであり、総合的に患者・生活者をみる姿勢を身につけた医療従事者へと成長し、地域医療への貢献を拓くと考えている。

演題 11：「ポストコロナ時代の地域医療教育」　～協調を考える～

〇小山 耕太[1･2･3]、中村 孝典[1･2･5]、田宮 貞宏[1･2]、松井 邦彦[4･5]

[1]熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座
地域医療実践教育くまもと県北拠点
[2]くまもと県北病院 総合診療科
[3]熊本県健康福祉部 健康局 医療政策課
[4]熊本大学病院 総合診療科
[5]熊本大学病院 地域医療・総合診療実践学寄附講座

熊本県の人口 10 万人対の医師数は全国平均を上回るが、熊本市への一極集中が問題視されて久しい。これまでに熊本大学病院　地域医療・総合診療実践学寄附講座では、2009 年度及び 2014 年度に熊本県内の全有床病院に対して病院アンケート調査を実施した。そこで得られたプライマリ･ケアを主に行う医師のニーズの高さに端を発し、2015 年 4 月に熊本大学の地域医療学外教育拠点として、くまもと県北病院（旧公立玉名中央病院）に地域医療実践教育玉名拠点（当拠点）が新設され、9 年が経過した。

現在までに、当拠点は延べ約 100 名の卒後臨床研修医、約 300 名の医学部学生の地域医療教育を実践した。結果、玉名地域における当拠点の医師育成による効果として、以下の点への寄与が示唆された。

1）地域完結型の医療の提供（救急医療の充実、小児診療 24 時間体制の構築）
2）診療科の新規設置・常勤化（自院医師数の増加）
3）継続的な地域医療貢献（自院研修修了者の指導医としてのカムバック）

また、これらの玉名地域の局地的効果を受け、発表者は熊本県医療政策課に兼務で従事し、県全土に教育支援活動の展開を開始したので、この点についても併せて報告する。

演題 12：**ポストコロナ時代の地域医療教育　～協調を考える～**

「新たな時代の人材育成、離島から発信できるか」

〇琉球大学医学部医学教育企画室　金城 紀与史

新型コロナ感染症による教育への影響は大きかった。地域の現場でのリソースの乏しさから、感染防護の観点から教育は優先度が低くなり、学生が地域医療の実際を経験する機会が失われたのではないだろうか。人手不足、人口減少、診療科偏在など大きな問題を抱えるいま、医療者は多臓器疾患・治癒が困難な疾患などに対応することが求められている。従来の医学モデルの最先端である専門科ではなく、社会科学、看護学、情報科学などといった周辺領域と協働できる人材こそが、新たなケアモデルを生み出すイノベーションを生むのではないだろうか。チャレンジ精神豊かな若者への期待を述べる。

演題 13：**Z 世代が地域医療を担うとき　―Z 世代の学びと育成の悩み―**

〇琉球大学病院　救急部　大内　元

スマホと SNS が当たり前の世界で中学・高校・大学時代を過ごし成長してきた医学生・研修医。彼らも何ら特別な存在ではなく、他学部の学生や様々な業界の新人社員と何ら差は無いのではないだろうか。我々指導者は、つい「医学生」「地域枠学生」というフィルターで、彼らの意欲や使命感・責任感に必要以上に期待し、当然のこととしまいがちではないだろうか。

タイパ優先の彼らにとって、SNS や YouTube は重要な学習ツールであり、誰も紙のテキストなど見向きもしない。紙のテキストはあえて iPad に仕舞い込み（PDF 化）持ち歩き、そしてスマホで検索可能にしてしまう。“Cill & Me”に代表される Z 世代の価値観を踏まえた彼らの学びのスタイルとそれに対する新たな教育アプローチを考えることは医療者教育においても非常に重要である。長期的には専門医取得後も継続的キャリアサポートやメンタリングシステムづくりも不可欠である。

琉球大学病院

沖縄県地域医療支援センター